

労働力均質化時代の性と文化

Ⅱ. 性の解放と資本主義の精神（2）

越 智 和 弘

4. 均質化を達成するための条件

数え切れなく存在する文化のなかで、その一つだけが、ある時点を境に世界に規範を提供する支配文明のレベルへと飛翔しうる鍵が、「だれもが参加できる人間関係」を実現することにあることを、われわれはこれまでの考察のなかでつきとめた。地域性に根ざす文化の普遍性への転換とも言い換えうるこの条件を満たす方向で、過去500年ほどにわたり西欧が展開してきた時代が近代と呼ばれ、それを實現する手段が資本主義であることも、すでに確認しえたことである。¹⁾ ただ真の意味で、すなわちグローバルな規模で「だれもが参加できる人間関係」へと資本主義の門戸を開くうえで、20世紀の後半期に起きた出来事が果たした意味については、いまだ多くが語られていない。ここで疑われるのは、この時期にいたって資本主義が最後まで積み残してきた二つの大きな障壁を乗り越えた可能性である。二つの障壁とは、長きにわたり他者化され排除すべき対象とされてきた女性と非西欧人を、西欧人男性と同等に機能しうる労働力へと変換し資本主義のスタジアムに動員するうえでどうしても取り除かれねばならない問題であった。いうまでもなく資本主義を「だれもが参加できる人間関係」として理想的に機能させるうえで求められるのは、世界中どこであろうと、労働力としての人間を可能な限り均質化することである。それは、人種や性差といった人間が本来もつ違いを越えて、合理的かつ効率よく利益を上げることを無条件の使命として疑わない、経済のグローバルな拡大へ向けて日々精力を注ぐ人材を増産しうる道をみいだすことである。ではそれを實現するためには、何が必要であったのか。

労働を均質化し、その量を無限に拡大するという資本主義に本質的に組み込まれた要求は、当然ながら20世紀以前においても作用してきたはずである。しかし、それをグローバルな規模に広げることを差し迫った課題として西欧の男たちが認識しはじめるのは、早くても19世紀後半期の植民地主義時代以降であっただろうし、実質的にはやはり二度の世界大戦を経たあとの20世紀後半期を待たねばならなかったのではないだろうか。たしかにそれ以前の時代においても、啓蒙の名のもとに、理性と合理主義を普遍的価値とみなす労働力の拡大政策を、西欧は推し進めてきたという主張もありえよう。とりわけ19世紀後半期以降は、植民地化された非西欧諸地域、あるいは西欧の価値を進んで受け入れた日本などにみられるように、啓蒙のプロジェクトは西欧の地理的境界を

越えて、その有効性を広げてきた。しかしそれらは、たとえば平等原則ひとつをとっても、実態は依然として西欧の男性のみを対象とした、つまり女性と非西欧人を度外視したいわば二枚舌の動員であり、個人の行動選択の自由や法の前での平等、科学合理主義や進歩といった16世紀以降の近代が生みだした普遍を謳う諸価値を、女性と非西欧人も平等に共有すべきだとする主張が声高に叫ばれ、それを到達目標とみなすコンセンサスが浸透するには、やはり20世紀後半期を待たざるをえない。

こうした流れを今日的視点から振り返れば、本章1項で紹介した「世界の文化地図」で示されたように、宗教や道徳習慣などの伝統的障壁が、21世紀に入ったいまでもなお、西欧的価値を普遍とみなす教育にブレーキをかける要素として立ちふさがる地域がたとえ現在もなお存在していたとしても、それらはもはや国境を越えて有無をいわず侵入してくる市場経済のバスに乗り遅れる口実にはならない。つまり西欧普遍主義のルールに則ってプレイされる資本主義というボールゲームへの参加を拒否することは、もはや地球上のいかなる地域に生きる人間にも許されない現状は歴然としているのである。ただここで問題とせざるをえないのは、啓蒙の実質的な適用範囲が西欧人男性に限られていた時代から、たとえその間に西欧的価値を強要する植民地主義の段階が介在したとしても、今日あるような、すべての人びとが西欧的価値に基づいて均質化された労働力となるべく努めることを、無条件に受け入れるステージへの移行がスムーズに訪れたとは、ただちに納得しがたいことである。そこには西欧的価値を植民地主義的に押しつけるだけではない、女性と非西欧人という、長きにわたり排除の対象とされてきた他者を取り込むために、他者に押しつけてきた負の烙印を資本主義の側から解除する巧妙な戦略が実施された可能性が疑われる。つまりこの西欧史上でも稀にみる特異な操作が実施されたことによってはじめて、市場全体のトポロジーに変容がきたされ、その結果として今日あるだれもが均質化された労働力となることを当たり前と信じる時代が到来したと考えられるのである。むしろそうみないかぎり、これまでわれわれが確認しえたような、禁欲の一義的かつ絶対的な実践によってこそ生まれえた資本主義を支える天職倫理の精神など、とても理解することを望めない女性的他者を資本の世界に大量動員する道は、到底開けなかったはずである。

いうまでもなく西欧の男たちは、かつてドイツの哲学者アドルノとホルクハイマーが看破したように、「自然を象徴するものとしてイメージされる」女性と女性的他者としてある非西欧人を秩序から排除し、理性の名のもとに「はてしなく自然を征服し、調和に満ちた世界を無限の狩猟区に変えること」²⁾を目指し一貫して勤しんできたのだといえる。普遍を標榜しつつも、じつは自分たちだけで世界中の利益を独占しようとしてきた西欧人男性の帝国主義的理性が、たとえすでに植民地主義の時代から「戦闘的でありつつも教育的」な徴候をみせはじめていたとはいえ、そもそもいつの時代から、「外見は

人間のようにでありながら、じつは人間ではない」とみなされる女性と女性的他者を、真剣に「人間にしてやらねばならない」³⁾、すなわち西欧の男と同等に機能する労働力として資本の世界に取り込まねばならないと考えるようになったのか。そしてその実現のためには、資本主義の軌道にいかなる修正が必要となったのか。この問題、すなわち 20 世紀後半期にいたって初めて起きた、資本主義を支える精神の変容について考えることが、以降われわれの主眼となる。

ここには、すでに随所に顕在化しつつもこれまで積み残されてきた疑問に、今日の視点から改めて向き合う必要性が判明する。それは 20 世紀後半期以降、西欧的規範に則った経済活動がますますグローバルな規模で浸透するなか、近代資本主義をそもそも生みだし機能させる核心として、われわれの前に立ち現れた西欧にしか存在しないあの特殊な精神、すなわち性的欲動を抑えこみ、それを超自我という自我の内部にある厳格な法廷をとおり個人の心のなかで監視するという、どうみてもプロテスタント的倫理観のなかからしか生まれえなかった禁欲をとおり無類の労働エネルギーを産み出すという、そのままのかたちでは世界の多くが追従しうるとはとても思えない込み入った機制が、いかにして女性的他者にも理解可能なものへと変換されたのかという疑問である。言い換えればそれは、資本主義の機能面におけるグローバルな覇権には支障をきたさないまま、いやむしろその規模とスピードを加速させるために、資本主義の駆動力をなしてきた性的悦楽を敵視する精神は、いかに変質もしくは無効化されえたのかという問いである。

性的悦楽を邪悪なものとして敵視することで性への強い罪責感を生み出す心的メカニズムが、地球上のいかなる文化と比較しても西欧に唯一的であることは、これまでの考察のなかから示されたとおりである。⁴⁾ 性的欲動を断念させる言説形成において、西欧が他のどの文化とも異なる性格をもっており、その類い希な異質性を 16 世紀にキリスト教修道院という閉鎖された窓から世俗社会全体へ解き放つことによって、近代資本主義が始動しえた事実を踏まえれば、この西欧にしか存在しない性を敵視する性格をかたちを変えずに保持したまま、資本主義がグローバルな浸透を果たしえたとは考えにくい。このことから資本主義には、西欧という限られた領域を越境して広まるために、その精神に大きな改造を施す必要が生じたことが予想される。言い換えればそれは、プロテスタント的禁欲を本来的に理解しえない他者、すなわち女性と非西欧人に、資本主義を支える精神についてはなんら知識をもたなくても、資本主義のルールにしたがった経済活動に支障なく参加しうる環境をつくり出すことである。そのためには、資本主義のルールを守れるよう女性的他者を教育することも肝要だが、むしろわれわれの関心を引くのは、そもそも性的悦楽の体現者と決めつけられてきた女性および非西欧人に、厳格な禁欲の精神を教え込むことには本源的な矛盾があることである。それを踏まえると、じつは女性的他者の側にはなく、長きにわたり性を諸悪の根源として追い回してきた西欧の禁

欲の精神そのものに、ある時期を境に決定的な変容が生じたと考えるほうが妥当性が高いように思える。

資本主義を支える禁欲の精神をある意味で無化するための初期的な試みが、じつは早い時期に起きていたことを、すでにわれわれはみてきた。⁵⁾ その過程は、ルターの宗教改革を契機にドイツ語圏で芽を吹いた資本主義の精神が、カルヴァニズムからピューリタニズムによる合理化と数値化というフィルターをくぐり抜けるなかで、やがてイギリス功利主義によってひとつの実践可能なものへと実を結んでいったことにみてとれる。その結果起きたのは、厳格な禁欲をとし勤勉な労働を生み出すという天職倫理の名目は保持しつつも、その際にみずからの勤勉さを証明するための神への申し開きが、効率化と合理化に基づく数値的成果を拠り所とする傾向を一層強めることで、本来あった悦楽敵視の精神そのものを効率性追求の背後に追いやってしまったことである。それは、功利主義の父とされるイギリス人ジェレミー・ベンサムが、人間を苦痛と快楽という二つの支配下にある存在と見立て、人間の行動はすべて快楽への希求と苦痛の回避に基づいており、ゆえに、快楽や幸福をもたらす行為は善であるという道徳原理をうち立てたことに端的にみてとれる。この考えに基づき、正しい行為や政策とは、社会集団としての幸福を最大限に高める「最大多数の最大幸福」をもたらすものだとする、かの「功利性の原理」が生まれたのである。重要なのは、ベンサムが「功利性の原理」を、「禁欲の原理」とは本来的に対立するものと位置づけ、それによってドイツ人ルターが主張した厳格な禁欲の実践を、幸福を減退させ苦悩を増加させる弊害として退けたことにある。⁶⁾ 以降資本主義の潮流からは、禁欲の精神は表向きには薄まるどころか、むしろ性を敵視し監視する方向で厳格化の一途をたどる様相を表向きにはみせながら、じつはその裏で、労働の数値的成果さえ達成されれば、その報酬として現世の享楽を得ることは肯定されるという傾向が生まれた。これは性的悦楽を諸悪の根源として退ける精神の形骸化につながるものであり、その点において、ドイツ的禁欲のアンゲロ・アメリカ的な功利主義への転換と位置づけられるこの変容は、資本主義発展の中心軸をドイツ語圏からイギリスやアメリカに大きく移行させ、やがてそれを西欧以外の地域においても受容可能なものにしていくうえで大きく貢献することになる。しかしここでやはり問題となるのは、たとえ禁欲に功利主義的な修正が加えられたとしても、性を、そして性の体現者である女性を敵視する心情に関しては、それは依然として維持されたままであったことである。性的悦楽を敵視する倫理が有効に働いているかぎり、悦楽の体現者である女性および非西欧人を、男性と同等に均質化された労働力として資本に取り込むうえでは支障が生じつづける。これがいってみれば、20世紀前半期にいたるまでの西欧の状況であった。したがって、性差を超えたグローバルな規模での労働力の動員を可能にするには、資本主義を支えてきた女性と性的悦楽を敵視する精神そのものに、かつてない変

容を迫る行動がこの20世紀半ばという歴史的時点にいたってどうしても必要となったと考えられるのである。そして、皮肉にもその行動を起こした当事者が抱いた理想や意識とはまったく別の次元で、つまりまさに資本主義が必要としていた要求に応えるかたちで作用したのが、1960年代以降西欧のプロテスタント地域を中心に勃発した若者による性の解放運動とフェミニズムであったとわれわれは位置づけるのである。

5. 性の解放を誘因した三つの要素

今日的視点から振り返ると性の解放運動とフェミニズムは、まるで資本主義そのものが意志をもって引き起こしたものであるかに映る。つまりそれは、女性と非西欧人に押しつけられてきた烙印を取り除くこと、すなわち性的悦楽の体現者であることを止めさせることで、女性的他者を西欧人男性と同等に機能する均質化された労働力として動員することである。しかし当然のことながら、性の解放にしてもフェミニズムにしても、それを推し進めた当事者である若者たちの意識は、資本主義のグローバルな発展に貢献することからは最も遠いところにあった。ここで問題となるのは、西欧の若い世代が起こした主体的な行動と、ヘーゲル的な意味において歴史のプロセスの中に位置づけられる資本のダイナミズムとのあいだにある、性をめぐる意図しない重要な関係である。しかしこの問題は、先にいって性と思想の関係を考察の対象とする際に詳しく取り上げることをここで確認したうえで、第二次世界大戦後の西欧においては、異なる領域でほぼ同時に起きた現象が互いに作用し合うことで、性の解放運動を引き起こす舞台が準備された事実を検証しておかねばならない。歴史的偶発性に満ちたこれらの出来事は、つぎの三つの要因として分類される。

1) ベビーブーム [第一の要因]

60年代後半の西欧社会が、戦後ベビーブーム世代が思春期を迎える時期と重なっていた事実には無視しがたいものがある。そもそもベビーブーム世代ということばの起源はアメリカにある。それは通常1946年から1964年(1946~1964)にかけて生まれた世代を指してもちいられる⁷⁾。戦争終結の喜びもつかの間、やがて冷戦構造による新たな世界戦争への恐怖に包まれていったこの時代に、高い出生率に湧いた欧米先進工業国で生まれた子の多くが、1960年代後半から70年代にかけてティーンエージャーとなり、やがて結婚適齢期を迎えていく。⁸⁾ この世代に先立つ、いわゆるサイレント・ジェネレーション(1925~1945年生れ)や、後につづくジェネレーションX(1965~1981年生れ)と呼ばれる世代と比べても際立って高い人口比率を占めていたベビーブーム世代⁹⁾が思春期を迎えた時期と、性の解放運動が勃発する時代が重なるのは、けっして偶然とはいえない。「多くの点において60年代の性革命は、人口学的かつ生理学的なエネルギーに

起因している」¹⁰⁾とみなす見解は、こうした事実を踏まえたものだといえよう。「カウンター・カルチャーや抵抗運動、それにアクティヴィズムのほとんどとまではいわずとも、かなりの部分を突き動かしていたエネルギーは、たんに若い子らのセックスをした衝動に由来していた」¹¹⁾とも証言されるように、性の解放をもたらした要因を検討する場合、まずはとにかく60年代後半が、セックスの相手を強く求める世代が他の人口層を圧倒する、いわばリード過負担が西欧先進諸国に起きた時期であったことを知っておく必要があるだろう。

2) ピルの出現 [第二の要因]

二つ目の下地は、ピル¹²⁾の出現という医学テクノロジーの成果に起因する。西欧の1960年代はピル(経口避妊薬)の解禁とともに始まったといっても過言ではないからである。1939年にナチ政権を逃れアメリカに渡ったウィーン生まれの化学合成学者カール・ジェラッシが1951年に化学的合成に成功した経口避妊薬は、その後世界保健機構(WHO)の後援のもと、タイ、プエルトリコ、メキシコ、アメリカなどで臨床実験が重ねられ、同時に開発を進めていたアメリカの内分沁学者グレゴリー・ピンカスらの協力も得て、1957年にまずは月経不順の治療薬としてアメリカで認可される。しかし1960年にアメリカ食品医薬品局が避妊薬として正式に認可するや、それはあつという間にアメリカ全土に広まった。この時期アメリカの大半の州では依然として中絶が非合法であり、信頼性の高い避妊法への要望が強かったこと、性器注入方式の避妊などに比べ経口投与できる簡便さなどが、キリスト教的伝統が障害になるはずだという保守派による当初の予想に反し、ピルがアメリカの幅広い層から歓迎された理由だとされる。

西ヨーロッパ諸国においても状況は似かよっていた。¹³⁾当時の西ドイツでは、1961年にベルリンのシェーリング社が、「アノヴラール」という商品名で経口避妊薬の発売を開始した。ドイツにおいてもやはり当初は、未婚の女は婚前性交渉をもつべきではないという倫理観が浸透していたため、避妊薬が必要となる大義名分はないし、加えて既婚の女性はできるだけ多く子を産むべきなので、やはり避妊薬は必要ないはずだとするキリスト教会の論理が表向きは支配していたため、避妊については公然と議論することが社会的タブーであった。したがってシェーリング社もアメリカでの導入方法と同じく、当初表向きは「生理不順を改善するための処方」としてピルの販売を開始せざるをえなかった。しかしそれも、わずか一年後には保守派政治家や教会関係者らの警告をよそに、圧倒的な需要によって避妊薬として合法化され西ドイツ全土に広まっていった。ちなみに旧東ドイツの社会主義体制下においても、1965年には人民所有企業イエーナファームによって「オヴォジストン」という商品名でピルが認可されている。

ピルという医学テクノロジーの成果が、当初期待されたように人口の制限が望まれる

発展途上国においてではなく、西欧先進工業国で爆発的に浸透した事実は、かつてフーコーが語った西欧近代の大前提、すなわちセックスにおける「不毛な活動を否定し、的外れの快楽を追放し、生殖を目的としない行動を減少あるいは排除」することで「人口の増殖を保証し、労働力を再生産し、社会的関係をそのままの形で更新する」¹⁴⁾ という使命に、1960年代にいたって前代未聞の変化がもたらされた可能性を示唆している。なぜならピルという手段は、つぎに確認する性表現にたいする検閲の撤廃と相互補完的に作用することで、西欧を長いあいだ支配してきた性を敵視する風潮を無効化し、再びフーコーの「ことばを借りれば、近代の人間のメルクマールをなす「性的欲望を動員する装置」を暴走させるカンフル剤として機能した可能性が高いからである。西欧人は、ピルによって歴史上初めて、つねに否定的な意味を賦与されながら、しかしまさにそうであるがゆえに言説化の爆発的増産に晒されてきた禁じられた性への好奇心を、妊娠を怖れることなしに満たす切符を手にしたのである。¹⁵⁾

この時代以降出生率が著しく後退した責任をピルの普及のみに押しつけるのは神話でしかないとする医学的見解もある。¹⁶⁾ たしかに西欧諸国の人口状態は、すでに20世紀初頭から全般的な減少傾向にあったことも事実である。さらに、出生率の変動にはつねに社会文化的要素が複合的に絡んでいること、とりわけ1960年代以降は、女性の高度教育、職場への進出がかつてない規模で進み、それに起因する婚期の遅れなども、出生率を低下させた要因として考慮されねばならないであろう。ただわれわれの考察にとって重要なのは、ピルが出生率低下の真の原因であったか否かではなく、ピルの存在が大衆に植えつけたセックスや男女の関係をめぐる新しい表象と、それが性の関係にもたらした変容の可能性である。すでにみたとおり、人口比において圧倒的な数を占めるベビーブーム世代が結婚適齢期を迎えた時期に、性を解放する要求の高まりと出生率の激減が重なっている事実は、ピルによって広められたイメージが、すくなくとも西欧の人びとに、性を敵視し恐れる伝統とは異なる新たな性的行動への幻想を抱かせたことは否みがたい事実であろう。

ピルそのものが、西欧人の性的活動を活性化させたことを学問的に裏づける証拠はない。しかしそのかわりに1960年代以降が、長きにわたったセックスにおける「遅れを取り戻したい」欲求が、若者にかぎらず社会全般において広く表明されたことが報告されている。それはたとえば、「パートナーの交換、バカンスでの恋、職場での情事、あるいは若い娘に乗り換えることによる糟糠の妻との関係の〈解消〉」といったかたちでしばしば現れたとされている。¹⁷⁾ 1972年の調査によると、性的に活発な年齢にあるドイツ人女性の4分の3が、まったくかきわめて希にしか避妊の措置を講じていないと答えたことから、じつはピルそのものよりは、ピルが大衆にもたらした開放的なイメージの方が、行動の変化を引き起こすうえで大きな影響を与えた可能性が高いのである。¹⁸⁾

ただそうはいえ、ピルが果たした役割を単に幻想の流布だけに帰結させることも完全に正しいとは言いがたい。とりわけ1970年代から80年代にかけて高まりをみせるフェミニズム運動にピルが与えた影響には、決定的なものがあつたとする証言がある。

新しい女性運動は、ピルの存在なしには考えられないものでした。ピルによって女たちは自立し、自分たちの性的欲望について考えをめぐらし、自己決定することができるようになったという事実を抜きにしては、フェミニズム運動は起こりえません。なぜならそれまでの女たちは、完全に男に依存していたのですから。¹⁹⁾

ピルが女性に与えた影響については、必ずしも肯定的ばかりとはいいがたい面も認められる。つまり多くの女性たちはピルを服用しはじめて以降、自分をより自由で幸福だと感じる一方で、当時は含有量が今日と比べ格段に高かったホルモンの副作用で体の不調を訴える、あるいはその不安を感じるといったマイナス面も生じていた。また、ピルによる性的な自由と自立が、必ずしも性欲の増大にはつながっていないという報告もある。²⁰⁾さらには、ピルの使用が当然視される風潮が生まれたことで、女性がつねにセックス可能な状態にあるとみなされ、逆に自由が縛られる側面が生じたとされる。つまり以前であれば、妊娠のリスクを盾に男の欲求を延滞させたり拒否することができたのが、ピルの使用が当たり前になったことで、言い訳が成り立たなくなったというのである。²¹⁾しかし全体としてみれば、こうしたマイナス面を考慮したうえでもなお、ピルの存在が1960年代以降の女性たちに画期的な変革をもたらしたことは、疑いようのない事実であるように思える。

ピルが60年代にどれほど解放的な作用をおよぼしたかについては、あまりにも簡単に忘れ去られている。私たちの世紀において、ピルほど女性の生き方に直接影響を与えたものはない。それはおそらく、参政権の獲得を上回る出来事であった。[中略]ピルの出現により、性をめぐる新たな試みを実践することが可能になり、それは男と女の間をよりオープンなものにした。出産を遅らせることが可能になったおかげで、女たちは仕事についても真剣に考えられるようになった。そしてピルは、フェミニズムと新しい女性運動の点火剤となったのだ。自己の肉体に責任をもてると感じられるようになったことで初めて女たちは、夫や父、上司や医者や教会の権威を疑問視することができるようになったのである。²²⁾

3) 性表現にたいする検閲の廃止 [第三の要因]

三つ目にあげねばならないのは、この時期に文学を中心に起きた性表現の解放²³⁾である。ここで目撃されるのは、言語化する性の領域を飛躍的に押し広げ、長きにわたり支配的であった性への恐怖心や敵対心を解除するうえで、文学が果たしたきわめて重要な役割である。それは、ふたたびフォーコーの表現にしたがえば、かのカトリック司教要綱以降3世紀近く西欧社会を律してきた嫌悪と猜疑心に塗り固められたセックスにたいする態度、すなわちおぞましきものとして罪悪視されてきた性をめぐるありとあらゆる様相や相関関係、そしてその作用を「枝葉末節に至るまでとことん追求」²⁴⁾しなければ気が済まない官憲当局の取り締まりと、一般大衆の性に対する過剰な警戒心が、20世紀の後半期にいたって突如として消滅する過程である。それは性表現をテーマにした文学作品が、検閲の圧力にたいしつぎつぎと勝訴していった時代であり、その結果を大衆が肯定的に受け入れることで、1960年代後半期になると、一転して性表現の氾濫が日常化していく時期としても位置づけられる。主だった文学作品を頼りに、その流れを概観しておこう。

火蓋を切ったのは、1930年代以来当局からの再三にわたる検閲、没収、逮捕にさらされてきたD・H・ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』²⁵⁾である。この作品の無削除版は1959年になって初めてアメリカで出版されたのだが、この時期においてもこの小説を世にだすには勇気がいったことは、出版を手がけたグローヴ・プレス社が通信販売の発送を始めたわずか二日後に164部が郵政省により没収されたことにもあらわれている。しかし時代の風は、すでに性的表現の解放を求める方向に吹いていた。裁判の結果連邦側は敗訴し、四か月後にはグローヴ・プレス版の『チャタレイ夫人の恋人』は16万1000部を売り上げ、ニューヨーク・タイムズ誌のベストセラーリストの二位にまで駆け上がっていた。²⁶⁾

しかし、当局はまだ性言説の監督者たる権利を完全に放棄したわけではなかった。『チャタレイ夫人の恋人』の勝訴から二年後、こんどはヘンリー・ミラーの『北回帰線』が刊行され話題を呼んだ。ミラーのこの小説は、1934年にパリで出版されて以来、アメリカでは一貫して発禁あつかいにされてきたものである。1961年6月に『北回帰線』の無削除版が発売されるや、警察はすぐさま摘発にのりだし、ニュージャージー州だけでも28名にのぼる書店経営者が逮捕された。発行元のグローヴ・プレス社を経営するバーニー・ロセットは、この本一冊のために60もの訴訟にさらされている。判決は州ごとに分かれ混乱を呼んだが、1964年6月の最高裁における判決をもって、『北回帰線』の合法性が確定した。²⁷⁾

ひきつづき1964年には、1820年代来発禁処分に使われてきた古典的ポルノグラフィ『ファニー・ヒル』²⁸⁾が出版され、すぐさまマサチューセッツ州が没収にのりだし訴訟

が始まった。この裁判が記憶に残るのは、ハーバード大学、ボストン大学、マサチューセッツ工科大学などの著名な英文学教授が、小説を弁護するために証言台に立ったことである。この訴訟も、1966年の最高裁判決により合法であるとの決着がついた。²⁹⁾ さらに1965年には、フランスの女性ジャーナリスト、アンヌ・デクロが、匿名ドミニク・オーブリーもしくはポーリーヌ・レアージュの作として1954年に発表した小説『O嬢の物語』³⁰⁾の英語訳が出版され話題となった。

しかし65年は、なんといってもウィリアム・バロウズの『裸のランチ』が出版された年として記憶に残る。この小説は、その斬新なカットアップ手法や内容とは別に、それまで50年代末以来繰り返されてきた官憲当局とエロティカ文学の闘いに文字どおり終止符を打った作品として、その歴史的な地位を得ている。なぜなら、『裸のランチ』が1966年に最高裁で合憲である保証を得てからは、言語化される性表現を、「まるで追いつめられた獲物のように」³¹⁾捕獲しなければ気がすまなかった性の監督者たちは、突如として追求の鋒先をおさめるからである。まさにこの年を境に、「書店が挑発的性表現を売り物にする詩からハードコア・ポルノにいたる、ありとあらゆる性をテーマにする書物であふれかえった」³²⁾とされるのである。

今日的視点からみれば、たかが文学作品における性表現を取り締まるのに、20世紀前半期までの官憲当局はなぜこうまで躍起になったのか、実感しにくい面があるのではないだろうか。しかし、性という悪霊を退治するためには、検閲を当然とみなす風潮が、権力の側に限ることなく少なくとも表向きは一般大衆にすべからく浸透していたのが当時の西欧社会の実情であり、それはまた、過去5世紀ほどにわたり受け継がれてきた伝統でもあった。ところが1950年代半ばからわずか10年ほどの期間を挟んで、権力は、性を邪悪なものとして執拗に追い回すことに突如として終止符を打ったのである。以降、性に関し少ない例外を除き何を書こうが表現しようが、いっさい検閲の対象とならない時代が西欧に到来する。

6. 1960年代と現在とのギャップ

これまで確認できた性の解放運動への舞台設定を果たした三つの現象は、それらを個別にみるかぎり、起きた時期が重なっている以外には互いの因果関係は認められない。にもかかわらず三つの要素には、それらが顕在化して以降、人びとが西欧史上かつて経験したことのない準拠³³⁾にしたがって生きていくことが可能となった、いやそうせざるをえない状況を現出させた点において無視しがたいものがある。つまり、たとえこれらの現象が同じ時期に起きたことへの合理的な原因は説明できないにしても、それらが相互補完的に作用し合うことで、性に関しまったく新たな意識が現前化した事実を抜きにしては、性の解放も、その申し子である女性のセクシュアリティの解放を目指す運動に

しても、20世紀後半期の西欧プロテスタント地域に起きることは考えられなかったであろう。ただし、ここであえて確認しておかねばならないことは、われわれの関心事が性の解放やフェミニズムが求めた政治的内容の正否を検討することではないことである。考察のターゲットは、あくまでも資本主義のグローバル化、すなわち西欧の近代史上一貫して排除の対象とされてきた女性と非西欧人を男性と同等に機能する労働力へと均質化するうえで、性の解放とフェミニズムが果たした役割の解明にある。そのためには、当面は歴史的偶然としてしか説明のつかない三つの要素に、これ以上とどまる必要はない。なぜならわれわれは、これら三要素によって性を解放する舞台装置が整えられたあかつきに、やがてそこから性の解放を理想に掲げる思想が生まれ、その理想の実現を目指す西欧の若者たちの行動が、女性的他者を資本のアリーナに動員するうえで、どのように貢献したのかを探る段階へと歩を進めねばならないからである。

肉体と性の思想化とその商品への還元主義としてひとまず予告される、これまたプロテスタント的としか言いようのない20世紀後半期に起きた資本主義にとって不可欠な戦略の考察に入るまえに、ひとつ確認しておかねばならないことがある。それは、1960年代以前の社会状況と比べると、今を生きるわれわれがすでに、資本主義の戦略が完璧なまでに達成されたあとの世界、すなわち歴史の舞台が大きく転換したあとの時代を生きている可能性が高いことである。これが意味することは、20世紀後半期にいたって資本主義がもっとも必要としていたことを再び想起すれば自ずから判明するであろう。それは、過去5世紀にわたり性と女性を一貫して敵視してきた仕組みを、資本主義の機能を損なうことなしに無効化すること、いや少なくとも新たに均質化された労働力として動員対象となる女性と非西欧人には、性的悦楽の排除こそが資本主義の精神的支柱でありつづけてきた事実を覚られないまま、資本のスタジアムに能動的に参入してもらう方策を講じることであった。そのために資本主義は、かつてない賭にでたのではないだろうか。それは、これまで抑圧の対象として最後まで残った性と女性の肉体性を逆に敢えて解放することで、女性的他者が本来もっていた圧倒的な力、すなわち近代市民社会の秩序を機能不全に陥れかねない肉体が一義的にもつ非合理的官能性の威力を無害化し、やがては消滅させてしまう戦略だったといえよう。

具体的にそれは、性と女性の肉体を解放するやいなや、それを無慈悲なまでに商品価値へと転換することで実践された。われわれが生きる現代は言ってみれば、こうした戦略がみごとに功を奏したあとの時代である。そうなると、この歴史的転換が起きる前の時代を知らない世代からすれば、性的悦楽とその体現者である女性のセクシュアリティが、かつては男性の構築する社会秩序にとりどの程度まで深刻な脅威であったかは、もはや認識しがたいものと映っても当然なのである。それは、すでに先の3項においても確認されたように、性の解放運動を引き起こした必然性、すなわち1960年代当時の若者

たちが抑圧の撤廃に向けて抱いた熱い想いを、今日の若者が実感しがたいものと受けとめると同時に、性にたいするある種のアパシーが社会に蔓延する傾向が顕著にみられることから読みとれる。こうした事態を考慮すると、性の解放が資本主義の精神におよぼした変容を解明することが、われわれの目標であることに変わりはないものの、その際に、われわれがすでに性をめぐって大きな「変容」が起きたあとの時代を生きているのだという認識をもつことも重要である。すなわちそこにはすでに、変容が起きる以前とは大きくかけ離れた性にたいする感覚、つまりすべてを解放すると同時に、商品価値へと還元され矮小化された性のみを性とみなす意識が支配する時代にわれわれが生きている可能性があることを確認しておく必要があるだろう。

すでに本考察の冒頭（第4項）でみたように、資本主義の精神構造には、早い時期にドイツ・プロテスタント的禁欲にたいするアングロ・アメリカンの功利主義による現世肯定的な要素の上塗りというかたちで、一定の軌道修正がなされた。しかしそれでもなお、性的悦楽を労働への意欲を産出するうえで最大の敵とみなし、その体现者を女性的他者に押しつける基本的な精神構造には、20世紀前半期にいたるまでほとんど変化はみられなかった。前章第5項で確認したように、性的悦楽の邪悪視と、それに惹かれる自我を厳しく規制する超自我の課す罪責感との挟み撃ちに合う心的構造のなかから生まれるプロテスタント的天職倫理は、たしかに比類なき労働のエネルギーを生みだす源となってきた。しかし、やがて資本主義が女性と非西欧人をも巻き込んだグローバル化、すなわち真の意味での「だれもが参加できる人間関係」へと脱皮すべき段階にいたると、それまで性を敵視しその体现者である女性に沈黙を迫ることで機能してきた資本主義の機制そのものに、大きくメスを入れる必要が生じたのである。というのも、性と女性への敵視が有効性を保っているかぎり、女性と非西欧人を西欧の男たちと同等に機能する労働力として動員するための道が開けるはずはないからである。性の解放運動とフェミニズムは、じつは運動を推し進めた当事者らが抱いた切実な思いとは裏腹に、この目的のためにこそ、つまり資本主義を「だれもが参加できる人間関係」として実現させるうえで、西欧近代が20世紀前半期まで積み残してきた最大で最後の課題を克服するためにこそ引き起こされた可能性が高い。

そしてその仮定が正しいとすれば、性と女性への敵視を無効化するプロジェクトが見事に達成されたあとの現代という時代を生きるわれわれは、「だれもが参加できる人間関係」という新たな歴史的段階に転換したあとの性をめぐる人間関係こそを、普遍だとみなすのである。さらにこの新たな性の関係が唯一普遍でありつづけるためには、半世紀前まで支配的であった女性的他者を排除する意識については、それをできるだけ早く人びとの記憶から消去してしまう方が好都合なのである。だからこそ繰り返しになるが、性の解放とフェミニズムが労働力の均質化に作用した過程を探る考察の目標を見失わな

いたためにも、第3項で確認された現象、すなわち1960年代後半期に性の解放運動が起きた必然性そのものが、そのわずか数十年後には理解も共感もできなくなったからくりについては、把握しておかねばならないし、そうした人びとのあいだで忘れ去られた性のもつ非合理的で豊穡な官能性を再び心に呼び覚ますうえで考えうる最後の手段としての芸術、とりわけ現代アートがもつ可能性に期待せざるをえないのである。

歴史的にみると、すべての人間を資本主義に資する労働力へと変換する近代的プロジェクトは、平等原則の名のもと啓蒙を武器に推し進められてきたと説明されることが多い。たしかに性差や人種を越えて人びとを均質化された労働力として動員することは、普遍を標榜する西欧的価値を内外に教育する戦略として継続的に推し進められてきたように思えるかもしれない。ただ、はたして本当にそうだったのだろうか。つまり啓蒙は、それが必要とする時間を経ながら直線的かつ継続的に世界に浸透してきたといえるのだろうか。じつはそうとは思えない証拠、すなわちある歴史的時点を境に、性差や人種を越えた平等意識が一気に高まった状況を、アメリカのテレビドラマシリーズ『マッド・メン』³⁴⁾は描きだしている。2007年に放映が始まったこのシリーズは、21世紀的な視点から60年代初頭アメリカの社会的状況、ファッション、生活様式、男女の意識などをその細部にいたるまで忠実かつ克明に再現することで、資本主義の旗手であるアメリカ社会においてさえ、わずか半世紀ほどをさかのぼるだけで、男女をめぐる価値が今日とは大きく異なっていた事実を視聴者に驚きと共に認識させること、つまりそこに現前化する途方もない意識のギャップにこそ商品価値を見だし、制作されたのだと考えられる。とりわけ注目に値するのは、ニューヨークの広告業界といういわば資本主義の最先端で活躍する男たちの周りに登場する女性たちの、職場環境や家庭、夫婦関係における悩みや葛藤に満ちた生き様である。そこには性の解放やフェミニズムがわずか数年後に勃興するとはとても思えない、男性と対等な存在としてはまるで扱われない女性の現状が、リアリティ豊かなエピソードとともに描きだされている。時代の最先端を行く当時の男たちは、押し並べて妻を敬愛しオフィスで働く多くの秘書たちとも紳士的に接しながら、しかし同時に女性にも自分たちと同等のクリエイティブな能力が備わるなどとは到底想像だにしない。それはたとえば、ある若い女性秘書が、偶然優れた広告コピーを考案し、それによって会社に大きな利益をもたらされた際に、男性社員の一人が「まるで犬がピアノを弾いたのを目の当たりにしたようだ」とコメントする場面にも如実に表れている。

今日的視点からみると別世界のように映るこうした男女の相関図を、ただ単に当時は「遅れていた」などとみなすことは、資本主義がこれまで実践してきた策略に見事に嵌まること以外には何も意味しない。むしろわれわれがこのテレビシリーズを観て認識すべきことは、60年代後半期以降、進歩的知識人があらゆる努力を払って無視しようとして

きた問題である。それは、性を解放し、世のなかのすべてを商品的交換価値へと還元しえたと思ひ込みたがるわれわれの眼前に、確実に存在しつづける肉体が一義的にもつ歴然たる事実、すなわち人間の生物学的な差異とそれに由来するコンプレックスである。

社会生活のなかでかたちづくられてきた性差を初めてジェンダーと名づけたうえで、「ジェンダーとは、一步一步の足どりや、あらゆる身振り振る舞いのなかにあられるものであり、単に股間にだけあるのではない。[中略] ジェンダーは、セックスとは別種のもので、セックスをはるかに凌駕するものである」³⁵⁾と規定したイヴァン・イリイチの意識は、今日ではまるで受け継がれていないどころか、そう考えることがまるで時代に逆行する罪であるかのごとき風潮のなかでわれわれは生きている。ジェンダーということばのみをその生みの親であるイリイチから借用しながら、資本主義により宿命づけられたジェンダーの消滅を憂うイリイチの意図とはまるで逆に、ジェンダーを政治的に解消すべき行動目標と掲げたフェミニズムがなしたことの多くもまた、今日的視点から見ると、「政治的ブルジョワ革命のごとき外見をもつ、フォームからなるシステム内部における〈ブルジョワ的〉革命もまた、市場システムの普遍化に貢献するものなのである」³⁶⁾と見抜いたフランスの思想家ジャン・ボードリヤールのことばを裏づけるものである。それはすなわち、女性的他者を均質化された労働力へと変換する資本主義の戦略に、女性たちがみずから進んで参入する行為以外のなにもものでもなかった、と評価せざるをえない。

いや、20世紀後半期に起きた意識のギャップを考えるなかからわれわれの目の前に浮上するのは、じつは女性運動の範囲をはるかに上回るものである。それは、われわれの関わる西欧伝来のアカデミズムそのものが、じつは資本の均質化に向けてひたすら貢献してきたのではないかという恐るべき疑いである。今日多くの学校教育においてなされていること、そしてとりわけ社会科学と称する学問領域の大半がおこなっていることが、「ジェンダーのセックスへの解消」³⁷⁾に資すること以外のなにもものでもないことを挙げ、まさにこうしたかたちでの性差の解消現象こそが、「現代という時代を他のどの時代からも引き離す決定的な人類学的特徴をなすものだ」³⁸⁾と言い切るイリイチのことばがはらむ甚大な意味は、今こそ真剣に考え直されるべき時期に至っているように思われる。われわれが前章第2項で確認したフーコーのいう「頑強な非知への意志」は、じつは性をめぐる問題に限って作用してきたのではないのかもしれない。むしろそれは、資本の発展に隷属する均質化された労働力を無限に増殖させていくうえで邪魔となるすべてを、知の力によって排除するために、学問領域全体を巻き込んで作用してきたのではないだろうか。そうなると、フーコーのいう真理を打ち立てるといふ知への近代的意志は、自然科学の領域においてこそ確実に功を奏してきたと言いうるものの、「社会科学ではまだなされていない」³⁹⁾というイリイチのことばにもあるように、その大半が資本主義の発

展に資する以外の面においては、ほとんど発展してきていない可能性がある。

たしかに社会科学にせよ哲学にせよ、資本主義がうみだすさまざまな問題を、歴史的発展状況に応じて詳細かつ実証的に分析することはしてきた。しかしそれはいつてみれば、そもそも言語をもちいて書き記す「哲学的（そして政治的）方法論そのものがすでに男性的な思考形態なのだ」⁴⁰⁾ と言い切るリオタールのことばによって、資本主義という徹頭徹尾男性的に整備されたスタジアムを健全に維持することに資するものとして回収されてしまう。いまいちど性の問題に戻ろう。20世紀後半期に起きた若者運動を契機に、たしかに性は一見すると解放されたかにみえる。しかし依然としてわれわれは、先にイリイチが示した「ジェンダーは単に股間だけにあるのではない」という説にたいし、では股間以外に何があるのか、と問い掛けられた場合、とっさには明解な答を見いだせない状況のなかで生きている。これが自然科学の領域の目覚ましい近代的発展とは対照的に、性をめぐる抑圧が知の世界において今日なお作用しつづけている証なのであろう。われわれは、資本のグローバル化に奉仕する以外の面では、依然として「頑強な非知への意志」によって緊縛されている。それを念頭におきながら、1960年代後半期に起きた肉体と性の思想化がやがてその還元主義へと流れ込む経緯の考察へと進みたい。

註

- 1) 近代資本主義を「だれもが参加しうる人間関係」からのみとらえる視点はナイーブで単純化されすぎており、そこからはあまりにも多くの要素が抜け落ちてしまうという批判を浴びることは、ある程度まで承知のうえである。それに対しては、性へのアパシーが生まれた仕組みを考えるという本考察が掲げる課題から目を逸らさないために、西欧近代の存在基盤を特徴づけてきた他の要素、例えば支配すべき自然と歴史認識や父権制を支えるシニフィアンとシニフィエの象徴的力学などといった、ただちに性差の消去へと向かうベクトル以外のさまざまな対立項については、ひとまず考慮の外におく必要があると述べておきたい。ただ、いわゆる古典マルクス主義的な意味における階級闘争の視点が欠落しているなどという批判がいまだあるとすれば、それにたいしては、マルクスはたしかに近代社会における個人の孤立化と疎外を問題にした点で評価に値するものの、それが必然的に労働者階級の連帯と組織化にいたると予想した点については、20世紀後半期という時代が、周知のようにはや資本家とプロレタリアートの単純な対立関係を超越した、より多様かつ不確実性に富んだ予想不能な連携やネットワークを連鎖的に生みだす「階級なき資本主義」の段階に突入しているとしたドイツの社会学者ウルリヒ・ベックの立場をむしろ支持することを、ここでは表明しておきたい。Ulrich Beck, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt am Main 1986, p.134.
- 2) Max Horkheimer / Theodor W. Adorno, *Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente*, Frankfurt am Main 1988, p.264.
- 3) フランスの哲学者ジャン・フランソワ・リオタールは、こうした女性的他者の捕獲と人間（男

- 性)への転換こそが、ヘーゲルやフロイトをはじめあらゆる男性思想家が自らに課した使命であったと述べている。Jean-François Lyotard, *One of the Things at Stake in Women's Struggles*, in: Jean-François Lyotard, *The Lyotard Reader*, Oxford/Cambridge 1989, p.115.
- 4) 越智和弘著、「労働力均質化時代の性と文化 I. 支配文明の基本構造(1)」、『言語文化論集』第33巻 第1号、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2011年、38頁。
 - 5) 越智和弘著、「労働力均質化時代の性と文化 I. 支配文明の基本構造(2)」、『言語文化論集』第33巻 第2号、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、2011年、49-50頁。
 - 6) Johannes Kaspar, *Der klassische Utilitarismus – Jeremy Bentham und John Stuart Mill*, Norderstedt 1999, pp.3-8. J・S・ミル著、川名雄一郎・山本圭一郎訳、『功利主義論集』、京都大学学術出版会、2010年、152-160頁。
 - 7) Howard Smead, *Don't Trust Anyone Over Thirty: A History of the Baby Boom*, San Jose/New York/Lincoln/Shanghai 2000, p.XV. こうした一般認識とはやや異なり、ハウ／ストロースのように、出生数の高い時期よりは同じ意識を共有する世代という面から1943年から1960年までに生まれたものをベビーブーム世代と分類する説もある。Neil Howe & William Strauss, *Generations: The History of America's Future 1584 to 2069*, New York 1991, p.8.
 - 8) 【ドイツの場合】同じ時期におけるドイツの出生率(人口1000人あたり生きて生まれた子どもの数)をみると、旧西ドイツ地域において1950年に16.2、1960年に17.4と、1998年の10.2と比べ圧倒的に高いことが分かる。合計特殊出生率(15歳から49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、一人の女性が仮にその年次の年齢別出生率で一生の間に子どもを産むとした場合の平均子ども数)でも、旧西ドイツ地域における1950年の数値が2.19、1960年が2.35と、1998年の1.41と比べ格段に高く、やはりドイツにおいてもベビーブーム世代の人口が多いことが分かる。Bernhard Schäfers/Wolfgang Zapf(Hg.), *Handwörterbuch zur Gesellschaft Deutschlands; 2., erweiterte und revidierte Auflage*. Leverkusen 2000, p.80.
【日本の場合】日本においては、出生率調査が戦後初めておこなわれた1947年から1949年(あるいは1950年)までの期間を「第一次ベビーブーム」と呼んでおり、1949年の合計特殊出生率4.32という数値が示すように、この期間に生まれた子どもの数が、その前後と比べ格段に多いのが特徴である。ちなみに1949年の出生数は269万6638人で、日本の出生数としては、未だ史上最多数を記録している。これは、2007年の出生数106万2604人の約2.5倍である。この期間に生まれた世代を「団塊の世代」とも呼ぶ。
すでに1950年以降出生率は急速に低下を始め、1950年代半ばには2をやや超えるまで下がり、1996年には1.41と、人口を維持するのに必要な水準(人口置換水準)である2.18を大きく割り込むという傾向を示している。厚生労働白書(厚生労働省/監修、平成13年版)248頁。
【日本に特徴的な第2次ベビーブーム】日本において今ひとつ特徴的なのは、1970年代前半期に、二度目の人口急増期(ベビーブーム)が訪れることである。ちなみに1973年の出生数は209万1983人で、この時期のピークを迎える。この第二次ベビーブームは、1971年から1974年にかけて生まれた約800万人を指し、これを「団塊ジュニア」と呼ぶこともある。
 - 9) Howard Smeadは、アメリカにおけるベビーブーム世代の総数を7600万人で、それは先立つサイレント・ジェネレーション(1925~1945年生まれ)と比べて約1700万人も多かったとしている。ベビーブーム初年度の出生数だけみても、340万人と過去最高を記録したのだが、それはさらに急激な上昇をつけ、1957年の430万人によってピークに達する。ベビーブーム世代

- の総数は、その多くが中高年を迎えようとする 90 年代後半期においてもアメリカ合衆国の総人口の三割近くを占めるとしている。 Smead, op. cit., p. xv-xvi.
- 10) David Allyn, *Make Love, Not War The Sexual Revolution: An Unfettered History*, New York 2000, p.196.
 - 11) Ibid.
 - 12) 今日ピル（経口避妊薬）は、英語では一般に combined oral contraceptive pill (cocp) と呼ばれている。ちなみに日本においては、経口避妊薬は日本医学界の協力の反対のもと、1999 年まで欧米での認可後も 40 年近くにわたって禁止されてきた。その主な理由は二つに分けられる。ひとつ目は、ピルを長期間服用した際の副作用が懸念される〈第 1 の理由〉というもの。もうひとつは、ピルを認可するとコンドームによる避妊率が下がり、それによって性交渉に起因する感染症が増える可能性が高い〈第 2 の理由〉というものであった。実際 2004 年の時点においても、日本人の避妊方法の 80 パーセントはコンドームによるもので、今日では、これが日本におけるエイズ発生率の比較的低い要因になっているともされている。経口避妊薬は、1999 年に公認されたが、政府はピルを使用する女性に三ヶ月おきに医者への検診を受けるよう奨励している。これは欧米の女性たちが、半年ごとか年に一度程度医師の検査を受けるのが通例であるのと比べると頻度が高い。
 - 13) スペインやイタリアといったカトリック色の強い国においては、教会側からの抵抗によりピルの認可がアルプス北方のプロテスタント諸国より数年遅れた事実は、われわれの考察にとっても興味深い。
 - 14) Michel Foucault, *The History of Sexuality: An Introduction Vol.I*, New York 1978, pp.36-37.
 - 15) この時期以降「ピレンクニック（ピルによる折れ曲がり Pillenknick）」という流行語がドイツ語圏で広く聞かれるようになった。意味しているのは、広く西欧諸国において 1960 年代に顕著にみられた出生率の急激な後退のことであり、その原因はピルにあるとされた。理由は、ピルが導入された時期を境に出生率がガクリと下方に「折れ曲がった」からである。旧西ドイツにおいてこの現象をたどると、1955 年から 1965 年にかけては急激な出生率の増加がみられた。いわゆるベビーブームと呼ばれる時期である。この出生率の増加は、1963 年の 18.3（人口 1000 人あたりの生存出生数）をもってピークに達する。しかしその年は同時に出生率が急降下しはじめる時期でもあった。以降ドイツ人の出生率は下降の一途をたどり、1978 年には 9.4 にまで下がってしまう。これは、ピルが合法化されてからわずか 15 年ほどの間に、ドイツ人の出生率が文字通り 50 パーセント近く減少したことを物語っている。とりわけ 70 年代半ばにおける出生率の減少はメディア報道などをおして広く大衆に浸透した結果、「ドイツ人は近い将来滅亡するのか」という危機感がまことしやかに叫ばれたものである。Keldenich, Beate. *Die Geschichte der Antibabypille von 1960 bis 2000. Ihre Entwicklung, Verwendung und Bedeutung im Spiegel zweier medizinischer Fachzeitschriften: "Zentralblatt der Gynäkologie" und "Lancet"*. Aachen 2002, p.103.
 - 16) Keldenich, op. cit., p.104.
 - 17) Keldenich, op. cit., p.111.
 - 18) Keldenich, op. cit., p.112.
Ibid.
 - 19) 断っておかねばならないのは、日本を含む非西欧地域の大半においては、西欧の女性たちが当

- 時抱いた意図は、同時代的にもまったく理解されなかった可能性が高いことである。したがって当然のことながらそれは、今日にいたっても依然として、その存在にさえ気づかれていないといっても過言ではないであろう。
- 20) 1978年から1981年にかけて実施された調査によると、ピルによってセックスをする際に以前のように身構える必要がなくなり気楽になったと答えた女たちが77.7%にのぼったのに対し、オルガスムスに達しやすくなったと答えたのが33.1%、性交の回数が増えたと答えたのが31.9%、性欲が高まったと答えたのが17.6%と、以前に比べ格段に低下したとされている。Keldenich, op. cit., p.115.
 - 21) Ibid.
 - 22) Keldenich, op. cit., p.118.
 - 23) これは、後にいわゆる「ポルノ解禁」と呼ばれるようになる現象である。
 - 24) Foucault, op. cit., p.19.
 - 25) この作品はロレンスの死から2年を経た1932年に出版(クノッフ版)されたが、その中身は作品のなかから性的表現をすべて削除したいわば「去勢された」ものであった。1944年にはダイヤル・プレス社が、性的描写のある箇所をいくらか盛り込んだかたちで出版されたが、ニューヨーク悪徳書禁止協会によって、ただちに400部が没収された。その後も作品の一部を出版する試みは幾度かあったものの、それらはすべて起訴か逮捕につながっている。Allyn, op. cit., p.311. ちなみに日本においては、伊藤整訳の『チャタレイ夫人の恋人』の完全版が、1950年4月に刊行されている。作品は警察当局の取り締まり対象となり、二か月後には「出版社の倉庫からばかりでなく全国の小売店の店頭からも押された」とある。以降この作品をめぐる訴訟は「チャタレイ裁判」として話題を呼び、1957年3月に最高裁において有罪の判決が出ている。またイギリスにおいては、アメリカに遅れることわずか一年後の1960年に、ペンギン・ブックス社が裁判に勝訴している。伊藤礼「改訂版へのあとがき」、『完訳 チャタレイ夫人の恋人』(伊藤 整訳、新潮文庫、1996年)564-568頁。
 - 26) Allyn, op. cit., p.63.
 - 27) Allyn, op. cit., p.65.
 - 28) John Cleland, *Fanny Hill* (1748): Clelandは1748年に負債不支払者の入れられる獄中にてこの小説を書いたとされる。1749年には、この本のために再逮捕されている。
 - 29) Allyn, op. cit., S.66.
 - 30) ポーリーヌ・レアージュ著、澁澤達彦訳、『O嬢の物語』、富士見書房、1983年。1967年フランスで*Retour à Roissy*の題名で匿名出版。映画『エマニュエル夫人』*Emmanuelle* (1974)によって成功を取めたJust Jaeckin監督により1975年に映画化された。近代資本主義の推進役を果たしてきたイギリスにおいて、この映画が2000年まで上映禁止であった事実も本考察にとり意味をもつものかもしれない。この点に関しては、さらなる検討が必要であろう。
 - 31) Foucault, op. cit., p.20.
 - 32) Allyn, op. cit., p.71.
 - 33) フーコーが描きだした、婚姻関係を核にすえた人間関係から性的悦楽を指針に人間が個別に行動する時代への近代的転換は、じつは20世紀半ば過ぎに起きたこの一連の出来事を境に、真の意味でその実現に向けてのギャシフトが起きたといえるのではないだろうか。Foucault, op. cit., pp.106-1114.

- 34) このドラマシリーズは、2007年の放映開始以来、エミー賞を15回、ゴールデングローブ賞を4回受賞するなどテレビドラマシリーズとしては絶大な成功を収め、2012年現在も第6回目シリーズが放映中である。
- 35) Ivan Illich, *Gender*, Berkeley 1982, p.68.
- 36) Jean Baudrillard, *Symbolic Exchange and Death*, London/Thousand Oaks/New Delhi, 1993, p.100.
- 37) Illich, op. cit., p.70.
- 38) Ibid.
- 39) Illich, op. cit., p.69.
- 40) Lyotard, op. cit., p.111.